

アチック・ミュージアムの水産史研究における 「同時代的な布置」と「問題意識の多様性」

Correlation with Political/Economic Situation of the Same era and Diversity
of Purpose of Research in the Study of Fishery History of Attic Museum

加藤 幸治

KATO Koji

要 旨

国際常民文化研究機構共同研究「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」では、渋沢水産史研究室の活動の全体像と同人たちの調査研究の追跡調査のみならず、その同時代的背景にも目を向けながら多角的に分析を行ってきた。その目的は、アチック・ミュージアムの研究所としての実像を把握することによって、渋沢敬三のいう“ハーモニアス・デヴェロップメント”の実像に迫ることであった。

漁業史に関するアチック・ミュージアムの資料紹介や民俗誌は、1935（昭和10）年から終戦までに、アチック・ミュージアム彙報やノートとしておよそ30冊が刊行された。後に水産史へと研究を拡大させたこの研究活動は、社会経済史的な性格を色濃くもち、それに従事した同人も経済史の出身者が大半を占めた。その研究の蓄積から、渋沢敬三は1941（昭和16）年、帝国学士院が紀元二千六百年記念事業のひとつとして企画された『日本科学史』のうち「漁業」を担当することとなった。その目次は日本水産史を総覧するものであり、内容的にも技術史のみならず、経営、労働、流通、分配、儀礼なども含めたもので、まさに常民文化研究そのものであった。昭和10年代後半の渋沢水産史研究室の研究は、こうした公的な事業とのかかわりの中で進められたものであった。しかし『日本科学史』編纂事業は、戦争激化によって頓挫した。

本報告書で検討したいのは、渋沢水産史研究室の活動に対し、見えてきた二つの論点である。ひとつは「同時代的な布置」である。これは、民俗学史としてではなく、近代の歴史のなかに、アチック・ミュージアムを位置づけなおす試みとして避けて通ることができない。もうひとつは「問題意識の多様性」である。これは、アチック・ミュージアムと渋沢水産史研究室に深くかかわった何人かの人々の、昭和10年代の研究を明らかにし、戦後の研究をどのように展開していく基礎となったかを見直すことで、ひとりひとりの問題意識を読み解く試みである。

【キーワード】 アチック・ミュージアム、水産史研究、民俗学史、社会経済史、科学史

1. アチック・ミュージアムの水産史研究における研究課題

人格的に平等にして而も職業に専攻に性格に相異つた人々の力の総和が数学的以上の価値を示す喜びを皆で共に味ひ度い。チームワークのハーモニアスデヴェロップメントだ。(1)

昭和前期、渋沢敬三がアチック・ミュージアムを主宰して目指したのは、“ハーモニアス・デヴェロップメント”(2)の精神であった。日本の常民文化研究という旗印のもと参画した、研究者や地方の在野の知性が、それぞれの技術や知識、個性を動員して取り組む研究のコミュニティの形成。その精神は、戦後の学際的組織による共同調査などへと受け継がれていった。

アチック・ミュージアムの同人たちが、もっともハーモニアスな調和をもって活動していた研究のひとつが、「水産史研究」であった。上記の渋沢敬三の文章は以下のように続く。「民具の蒐集も悪いことではない。漁業史の研究も良いことだ。文献索隠其他の出版も不都合なことではない」つまり、アチック・ミュージアムの研究の柱は、「民具蒐集」「漁業史研究」「文献索隠」と位置付けられているのである。「漁業史研究」はのちに「水産史研究」として射程を広げていったが、その研究は同時代性を色濃く帯びていた。

周知のように渋沢敬三は、第二次世界大戦前から戦後にかけて日本の財界で活躍する一方、アチック・ミュージアムを主宰し常民文化研究の発展に尽力した。その研究は、「民具蒐集」に代表される物質文化研究、民族学博物館建設や実業史博物館建設構想等の博物館的な活動、絵引の作成や「文献索隠」といった風俗史的な研究などを通じた、幅広い史・資料の総合的な利用による常民文化研究で知られる。

1932(昭和7)年に駿河湾に面する内浦の大川家の文書群との出会いを契機として、渋沢敬三は邸内の祭魚洞文庫内に漁業史研究室を新設し、「漁業史研究」のための資料収集と研究を推進した。アチック・ミュージアムは、当初は私的な同好会のようなものであったが、1935~6(昭和10~11)年頃には、研究所としての体裁を整えつつあった。

共同研究「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」での具体的な研究内容は、以下の三点であった(写真1)。

①海からの常民文化研究を研究上の大きな特色としているアチック・ミュージアムの研究では、海付きの集落における経営や技術、水産資源の確保と利用、そして海村の民俗や生活文化を具体的に記述する仕事が重視された。そもそもその研究の柱を、海洋と人々の関わりに置いたのにはどういう背景があったかを考察するための材料を整備する。



写真1 国立民族学博物館での研究会のようす

②アチック・ミュージアム彙報や同ノートを読み込んで調査の意図や成果を、具体的内容に即して把握し、その意図を探る。そのために共同研究メンバーには、漁村や海付きの集落をフィールドにミクロな調査を行ってきた研究者で構成した。

③アチック・ミュージアムの活動を知る手掛かりとなる資料は、国内各所の研究機関等に分散所蔵されている。未発表資料や基礎資料の翻刻や整理作業、熟覧調査等によって、「アチック・ミュージアムの研

究」“の” 研究に必要な情報を共有する。

2. 本格化するアチック・ミュージアムによる常民文化研究

アチック・ミュージアムはさまざまな“顔”を持っている。渋沢水産史研究室は一定の目的のために研究員らが調査研究活動を行う研究所であったし、駿河湾の内浦で見出した漁民史料の整理を目的とした内浦史料編纂室はアーカイブ的な活動拠点であった。民具や実業史関係の資料収集は博物館を見据えての活動であった。アチック・ミュージアムは、いくつかのプロジェクトのプラットフォームなのである。こうした体裁を整えつつあった頃に創刊されたのが『アチックマンスリー』であり、冒頭で引用した“ハーモニクス・デヴェロップメント”に言及した文章はその第一号に掲載されている。それは1935（昭和10）年であったが、この頃のアチック・ミュージアムは、第一部会（定例研究会）、第二部会（民具研究会）、漁業史研究室（のちの水産史研究室）、内浦史料編纂室で構成されている。また『アチックマンスリー』には、ピンポン部を創設するといった記事もあり、当時のサロンのような雰囲気が窺い知れる。渋沢敬三は、それらのすべてを統括する役割を担いつつ、魚名研究や釣漁の技術史、延喜式研究などをみずから担当した。

もともと動物学者を目指していた渋沢敬三は、邸内物置の天井のない二階に動植物や化石の標本を持ち寄って共有するサークルのような活動として、アチック・ミュージアム・ソサエティを1921（大正10）年に結成した。しかしそれは、横浜正金銀行ロンドン支店赴任のために活動休止状態となった。帰国後の1925（大正14）年、改めてアチック・ミュージアムとして再始動したとき、その研究内容は本格的な常民文化の共同研究となった。渋沢敬三は、穂積陳重、石黒忠篤、そして柳田國男らの学問を吸収し、日本の基層文化を庶民生活から明らかにすることにも関心を深めていたからであるが、水産史研究を主要なテーマに据えたのには、本共同研究で重視した「同時代的な布置」と深く関連していた。アチック・ミュージアムの研究活動は、満州事変に端を発生し、日

中戦争、太平洋戦争にいたる十五年戦争と平行に展開された。本共同研究では、学問の戦争協力やナショナリズムへとといった単純な批判からではなく、アチック・ミュージアムが研究対象としたものが、同時代的政治・経済においてどのような意味を帯びていたか、また当時の経済史研究において地方文書や家わけ文書を丹念に紐解いていくアプローチがどのような新しさをもっていたかを、本報告書ではいま一度問い直してみたいのである。共同研究の最終報告会として開催した公開フォーラム「再考 アチック・ミュージアムの水産史研究——“ハーモニクス・デヴェロップメント”の実像——」（2018年7月7日、神奈川大学横浜キャンパス）はそうした意図のもと企画した（図1）。

再開したアチック・ミュージアムは、当初は郷土玩具研究を中心に生産や流通、文化の伝播などに着手するが、そこからさらに具体的な人々のくらしの道具として足半草履をとりあげ、歴史、民俗、造形からの多角的な研究活動へと展開していった。その成果は

第4回共同研究フォーラム

再考 アチック・ミュージアムの水産史研究

—“ハーモニクス・デヴェロップメント”の実像—

2018. 7/7 [Sat.] 10:30-17:00
 神奈川大学横浜キャンパス 3号館305講堂

参加無料
 観覧券不要

主催：神奈川大学 国際常民文化研究機構 International Center for Folk Culture Studies

図1 共同フォーラム「再考 アチック・ミュージアムの水産史研究」のチラシ

1936（昭和11）年にアチック・ミュージアム編『所謂足半に就て（豫報）』（彙報第七）として刊行され、高い評価を受けた。この高橋文太郎、磯貝勇、宮本馨太郎、小川徹らとともに行った共同研究は、“ハーモニアス・デヴェロップメント”の「力」、すなわち「人々の力の総和が数学的以上の価値を示す」という実感を渋沢敬三に抱かせたことであろう。『アチックマンスリー』はまさにその時期に創刊し、渋沢水産史研究室もこの時期にしていたのである。

アチック・ミュージアムを再開させてから渋沢水産史研究室の研究が本格始動する昭和10年までのあいだ、渋沢敬三は常民文化研究に没頭していった。足半研究はもちろんのこと、各地に出向いて採訪を行った。また、岡書院を後援して早川孝太郎『花祭』（岡書院、1930年）の刊行をあと押しし、その刊行の年にあたる1930（昭和5）年には三河の花祭りを招いてその実演・記録を行った。これには柳田國男や柳宗悦をはじめ、多くの生活文化に深い関心を寄せる人びとが招待された。

1931（昭和6）年には祖父渋沢栄一が永眠、敬三は看病と葬儀の疲労から急性糖尿病を発し、翌1932（昭和7）年、当時は有名な別荘地・保養地として知られた伊豆内浦にある松濤館で療養することとなる。しかし、そこで渋沢敬三は地元の大川四郎左衛門と出会い、のちに豆州内浦漁民史料として世に知られる古文書群を発見、その膨大な量の筆写作业が水産史研究との出会いともなった。渋沢敬三が水産史研究を開始するきっかけとなったこの史料の翻刻は、1937（昭和12）～1939（昭和14）年に『豆州内浦漁民史料』として三分冊で刊行された。この成果は日本農学会「農学賞」を受賞し、漁業史研究に弾みがつくこととなった。

1936（昭和11）年の『アチックマンスリー』第8号には、「新設の祭魚洞文庫に二月山口和雄氏、五月櫻田勝徳氏、六月伊豆川浅吉氏の入所以来、本年より始められた漁業史の研究方法もやや目鼻がついた」「内浦史料編纂室は新設の文庫に移った。二月金子総平氏と代って小松勝美氏が、更らに三月野澤邦夫氏が入所」とあり、祭魚洞文庫における渋沢水産史研究室の研究活動は本格化していった。

3. 渋沢水産史研究室の同人らの研究成果

1935（昭和10）年からの10年間は、日中戦争から太平洋戦争の激化の時期にあたり、自由な学術研究が許容される余地は次第に狭まっていくこととなった。この時期、アチック・ミュージアムの研究活動は軌道に乗り、もっとも実り豊かな段階に到達した。それを可能にしたのは、水産史研究に集った若い知性の“ハーモニアス”な成長であった。その精力的な研究成果の刊行状況は、目を見張るものがある。

1935（昭和10）年、渋沢水産史研究室が創設されて間もない時期にもかかわらず、山口和雄は本格的な漁業経営資料の調査報告としての『明治前期を中心とする内房北部の漁業と漁村経済 上・下』（ノート第1）を刊行した。また、アチック・ミュージアムの隠岐調査の報告も、櫻田勝徳・山口和雄『隠岐島前漁村探訪記隠岐調査報告1』（ノート第4）、櫻田勝徳『糸満漁民の聞書 隠岐調査報告2』（ノート第2）が刊行された。また、以前より奄美群島の口頭伝承や民俗調査を進めてきた岩倉市郎が、喜界島での民俗誌調査の指針となる岩倉市郎『喜界島生活誌調査要目』（ノート第3）を刊行した。

1936（昭和11）年は、採訪記録として、櫻田勝徳・山口和雄『美保関・広島三津・伊予大三島漁村探訪記』（ノート第5）、櫻田勝徳『伊予日振島における漁業聞書土予漁村探訪旅行報告1』（ノート第7）、櫻田勝徳『土佐四万十川の漁業と川船 土佐漁村民俗雑記土予漁村探訪旅行報告3』（ノート第10）、伊豆川浅吉『土佐鯉漁業聞書土予漁村探訪旅行報告3』（ノート第8）、藤木喜久磨

『新島採訪録』（ノート第9）が刊行され、同人らが精力的にフィールドワークに出かけ、現地での調査報告を重ねながら、水産史研究が幅広く展開していく過程が見てとれる。この年のアチック・ミュージアムの成果のひとつに、宮本常一『周防大島を中心としたる海の生活誌』（彙報第8）がある。宮本は1935年（昭和10）年に泉北郡取石尋常小学校（現・高石市立小学校取石小学校）に赴任し、この年に大阪民俗談話会にて渋沢敬三と出会った。1937年（昭和12）年にはアチック・ミュージアムの瀬戸内海での調査に参加した。

1937（昭和12）年は、山口和雄が地曳網の網元史料を用いて研究した『九十九里旧地曳網漁業』（彙報第14）をまとめ、祝宮静も『近江国野洲川築漁業史資料』（彙報第15）の翻刻を刊行するなど、成果が次々と形になっていく状況にあった。そして何より、渋沢敬三『豆州内浦漁民史料上巻』（彙報第16）が完成し、内浦の史料整理が極めて活発に展開されていた。広島漁業青年、進藤松司は『安芸三津漁民手記』（彙報第18）として、みずからの労働を記録することで漁民の生業と生活の実態を記録した。

1938（昭和13）年は、渋沢水産史研究室の同人が総力戦で取り組んだ成果として、渋沢敬三『豆州内浦漁民史料 中巻之巻』（彙報第21）、渋沢敬三『豆州内浦漁民史料 中巻之式』（彙報第29）が、翌1939（昭和14）年には渋沢敬三『豆州内浦漁民史料下巻』（彙報第38）が刊行された。また、知里真志保の薫陶を受けた佐藤三次郎という漁業青年が漁村の民俗を記録して完成させた『北海道幌別漁村生活誌』（彙報第22）、伊豆川浅吉の土佐捕鯨の調査の現地協力者であった吉岡高吉名義で刊行された『土佐室戸浮津組捕鯨実録』（彙報第30）が刊行されている。この年には、渋沢敬三の研究においても大きな役割を果たした小野武夫名義で『宇和島藩吉田藩漁村経済史料』（彙報第24）が、アチック・ミュージアム名義で『宇和島藩吉田藩 漁村経済史料補遺』（彙報第26）が完成している。

1939年（昭和14年）には、宮本常一が教員を退職して上京し、アチック・ミュージアムに入所した。そこから他に類を見ない全国規模の採訪、踏査の旅が始まる。その皮きりとして行った中国山地民俗採訪調査では、鳥根県八束半島から岩国に達する旅を取行した（昭和17年に『出雲八束郡片句浦民俗聞書』として刊行）。伊豆川浅吉は引き続き土佐捕鯨の調査を継続しており、前年の『土佐室戸浮津組捕鯨実録』の続編としてアチック・ミュージアム編『土佐室戸浮津組捕鯨史料』（彙報第32）を刊行した。この年、山口和雄は新たに富山湾の定置網調査をまとめた『近世越中灘浦台網漁業史』（彙報第36）を刊行する。内房、九十九里浜、富山湾で、次々と研究成果を出していく山口の旺盛な研究意欲には驚かされるばかりである。また、アチック・ミュージアムは、外部の研究者に依頼して進める分野もあった。この年刊行された岩田準一『志摩の蟹女』（彙報第37）もそのひとつであった。戦後も継続する塩業研究へとつながる『塩俗問答集』（彙報第31）もこの年の刊行である。

1940（昭和16）年は、アチック・ミュージアム編『澁澤漁業史研究室報告 第一輯』（ノート第19）として、同人や外部の研究協力者らが寄

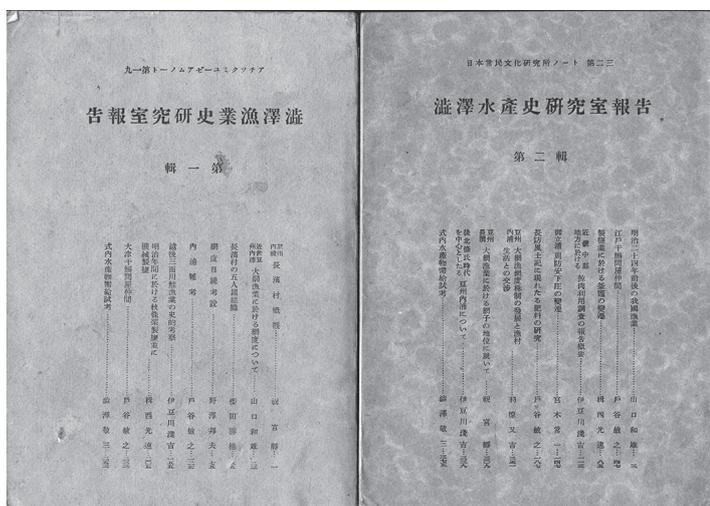


写真2 澁澤水産史研究室の研究報告2冊

稿している(写真2)⁽³⁾。渋沢水産史研究室同人では、気鋭の農業経済史研究者であった戸谷敏之が、『徳川時代に於ける農業経営の諸類型』(彙報第17)を、同じく経済史の若手研究者であった楳西光速も『下総行徳塩業史』(彙報第46)をまとめた。楳西はのちに本書で東京大学から経済学博士を授与された。また喜界島での調査報告を重ねてきた岩倉市郎は漁業についての調査をまとめた『喜界島漁業民俗喜界島 調査資料第4』(彙報第47)を刊行した。

1941(昭和17)年には、アチック・ミュージアム編『澁澤水産史研究室報告 第二輯』(常民研ノート22)が刊行された。前年の論集が「漁業史」であるのに対し、この論集が「水産史」となっているのは、前年から開始された水産史研究事業の影響があると思われるが、それについては後述する。第二輯は第一輯とは異なり、それぞれの研究の論考で構成されており、内容的にも力作ぞろいである⁽⁴⁾。この年、宮本常一は、前述の中国山地民俗調査の成果として『出雲八束郡片句浦民俗聞書』(ノート第19)を刊行した。渋沢敬三は、継続的に調査してきた魚名の研究を『日本魚名集覧 第1部』(彙報第50)をまとめた。また、人文地理学者の喜多村俊夫は、琵琶湖の淡水魚を対象とした内水面漁撈についてまとめた『江州堅田漁業史料』(彙報第49)を刊行した。この年、渋沢敬三は日銀副総裁に就任し、これ以降は研究に割くことができる時間が極端に減少してしまった。また翌年にかけて、空襲への備えから保谷(現西東京市)の民族学博物館の民具を対象に、宮本常一、宮本馨太郎、吉田三郎らが中心となって整理作業が急ピッチで進められた。

1942(昭和18)年は、土佐捕鯨の調査研究の集大成として、伊豆川浅吉『土佐捕鯨史上』(彙報第五一)、伊豆川浅吉『土佐捕鯨史下』(常民研彙報第57)を刊行した。伊豆川は引き続き、全国各地の捕鯨調査を進めるが、成果の一部は戦災で焼いてしまうことになった。宮本常一は、南九州での民俗調査の成果を『屋久島民俗誌』(常民研ノート23)としてまとめるが、1943(昭和19)年1月に大阪へ戻りそこで戦災に遭い、彼も貴重な原稿や調査資料の一部を焼いてしまうのであった。アチック・ミュージアム同人のなかでも将来を嘱望されていた戸谷敏之は、この年『明治前期に於ける肥料技術』(常民研ノート24)を刊行する。これは魚肥の経済史的研究であり、渋沢敬三の構想のなかでは水産史研究の重要な要素であった。しかし戸谷は翌年の1944年(昭和19)年に招集され、1945年(昭和20)年9月、フィリピンにて戦死した。この年、渋沢敬三は『日本魚名集覧 第3部 魚名に関する若干の考察』(常民研彙報第55)を、翌1945(昭和19)年には渋沢敬三『日本魚名集覧 第2部』(彙報第60)を刊行し、魚名研究のまとめにかかっていた。第16代日本銀行総裁に就任し、戦後最初の幣原喜重郎内閣の大蔵大臣となった。

1935(昭和10)年からの10年間を、研究成果としての彙報とノートの出版状況から概観してきたが、渋沢水産史研究室の活動は成果が出ていないものも含めて、多岐にわたる調査が同時並行で進められていた。

4. 水産史研究の事業化

前節では、戦前の渋沢水産史研究室の活動を概観した。その仕事量は圧倒的であり、若手研究者を中心とする同人らの精力的な調査研究活動と、それを統括する渋沢敬三のプロジェクト・リーダーとしての力量がしのばれる。しかし昭和10年代後半にあつては、すでに研究所としての体裁をととのえたアチック・ミュージアムの活動は、1935(昭和10)年に渋沢敬三が“ハーモニアス・デヴェロップメント”を目指すと同時に呼びかけた時期の、自由闊達な学びの場といった自由さをどれほど保持していたであろうか。もちろん、同人や協力してくれる研究者らがそれぞれの高水準な研究成果を途切れなく公刊していく状況から、同人が互いに刺激を与えあう相乗効果はあつたで

あろうが、民具研究が民族学博物館の建設というかたちで事業化していったのと同じように、渋沢水産史研究室も純粋な学問の発展だけを考えていればよい状況にはなかった。

1941（昭和16）年、帝国学士院は紀元二千六百年記念事業のひとつとして日本科学史の編纂を企画した。その範囲は、数学、天文学、物理学、薬学、博物学、人類学及先史学、建築学、土木学、採鉱冶金／地学／鉱物学、造船／兵器／機械学、農学の11分野におよぶ、巨大な研究プロジェクトであった。それぞれの分野を大分類とすると、それをさらに細分化したいくつかの小分類の集合で構成されていた。渋沢敬三らは、農学の分野に深く関与することとなり、その農学は農学博士の安藤廣太郎で、1 農学（担当：小出満二・菊池秋雄）2 養蚕（担当：平塚英吉）3 畜産（担当：岩住良治）4 林業（担当：徳川宗敬）5 漁業（担当：渋沢敬三）という構成であった。安藤廣太郎は、渋沢敬三が昭和15年に受賞した農学賞を授与した日本農学会の当時の会長であった。

渋沢敬三が編纂の担当となった漁業の巻は、漁業史の集大成ともいえる構想であった。当時の目次の案は、『明治前日本漁業技術史』（日本学士院、1958年）に回顧するかたちで掲載されており以下の通りである。

『日本科学史 農学（漁業）』目次案

第一編 序説	第三章 雑漁業
第一章 水産技術史と自然条件	第四章 採捕特殊装置
第二章 水産技術史と社会条件	第五章 捕鯨、水上漁業そのほか特殊漁法
	第六章 漁船
第二編 総説	第七章 其他の水産技術（山アテ、海上諸測定、気象観測等）
第一章 漁業	第八章 養殖と蓄養
第二章 養殖	第九章 水産製造
第三章 水産製造	第一節 食用品
第四章 水産技術の伝播	第二節 工用品
第五章 製塩	第十章 肥飼料
第六章 水産功労者概観	第十一章 製塩
第三編 各説	
第一章 網漁業	別冊 水産事跡略
第二章 釣漁業	

この目次構成を見ていると、網漁業は山口和雄、釣漁業は渋沢敬三、水上漁業は竹内利美といった具合に、それぞれ担当する同人が思い浮かぶであろう。帝国学士院が日本科学史の編纂を企画した1941（昭和16）年、アチック・ミュージアムの活動、とくに渋沢水産史研究室がどのような活動を行っていたか、『明治前日本漁業技術史』の「はしがき」にはその進捗も回顧されている。

まず、昭和16年以前より既に着手中の筥調査が続行している。これは郵便による通信調査を中心としたもので、全国規模のアンケート調査から筥、横筥、透明筥の三種の形状や使用法、方言などについて調査するプロジェクトであった。アチック・ミュージアムとしては、足半草履の次に共同研究とした行うためにテーマ化されたものであったが、内水面漁撈の陥穽漁法にあたることもあって渋沢水産史研究室同人らもこれに深くかかわった。次に、昭和16年9月からこれも通信調

査で鵜飼についてのアンケートを発送している。鵜飼も内水面の漁撈のひとつとしてテーマ化されたものである。そして、中世日記類より魚名及魚に関する資料抜粋を岩田準一に依頼とある。岩田はすでに1939（昭和14）年に『志摩の蟹女』を刊行している。この後継に位置づけられる研究も視野にあったと思われるが、内容が魚名の調査とあるので、渋沢敬三の魚名研究に資する情報の提供を求めたものかとも思われる。また、古典よりの水産資料抜粋とあるのも、同様の調査であろう。史資料調査も活発で、昭和16年夏には、土屋喬雄の好意により東大経済研究室所蔵の地方誌類より漁業関係資料を抜粋している。また、翌昭和17年には、渋沢敬三・宮本常一による秋播磨加東郡釣鉤製作実地資料調査、宮本常一による淡路及び越前のテグス実地調査が行われており、渋沢敬三が担当していた釣漁の調査を宮本がサポートするかたちで進められていた。加えて、竹内利美による諏訪湖及八郎潟水上漁業実地調査も実施されている。

昭和16年の渋沢水産史研究室の研究状況をみると、個別のテーマがバラバラに進められているようにみえるが、前掲の目次案を念頭に置いていた渋沢敬三は、多岐にわたる調査研究活動を方向付けつつ、壮大な漁業史の全体像に位置づけながらオーガナイズしていたと考えられる。1941年（昭和16）年12月には真珠湾攻撃が行われ、太平洋戦争へと突入していく時期であったが、同人らが調査研究のペースとレベルを落とすことなく続けていた背景には、水産史研究が公共に資する事業に転換していたことと大きく関わっている。

ただそれでも、太平洋戦争末期の昭和10年代末期、アチック・ミュージアムの水産史研究は頓挫した。『明治前日本漁業技術史』の「はしがき」には、当時の追い詰められた状況をみることができる。「昭和18年11月頃 網漁業史は一応完成、釣漁、捕鯨、雑漁業も八分通り進捗、水産製造・製塩等も可也信仰、未着手項目も二三あり、写真は九分通り印画」とあることから、全体としては研究は進展していた。しかし、「製塩 揖西光速 漁船 桜田勝徳 鰹漁 伊豆川浅吉 魚肥 戸谷 水産製造・釜漁 相当苦心努力して調査乍らも未完成のまま」とあるように、この事業が容易ならざる規模と内容であったことがうかがわれる。

『明治前日本漁業技術史』によれば、その後戦争は激化し、召集された戸谷敏之ほかが戦死、宮本常一は大阪へ、桜田勝徳は水産局に転出、渋沢栄一伝記資料編纂所の職員の応集により山口和雄が異動、1942（昭和17）年に日本常民文化研究所と改名したアチック・ミュージアムは、活動そのものの縮小を余儀なくされ、漁業史の成果も未完成のまま500頁の原稿を日本学士院へ提出して一旦中断したとある。

第二次世界大戦後、日本はGHQ（連合軍最高司令官総司令部）の指令に基づいて、財閥解体や農地解放など国内の諸制度の民主的をはかる一環で漁業制度改革にせまられた。そのための基礎資料調査を目的とした「漁業制度資料調査保存事業」が、水産庁より日本常民文化研究所へ委託され、渋沢水産史研究室の研究を引き継ぐかたちで、全国から史料が集められた。この事業は資金が打ち切られ、一部の未返却の資料をのこしながら、資料は最終的に現国文学研究資料館と現水産研究・教育機構中央水産研究所に引き継がれた。

5. 戦後の水産史研究の出版

戦後、日本常民文化研究所の活動は、前述の通り1949（昭和24）年に水産庁から水産資料の調査保存を委託され、東京・月島の東海区水産研究所の分室（通称：月島分室）での漁業資料の調査収集・筆写、目録等の作成作業から活動を再開した。そして、日本民衆の生活・文化・歴史の研究所として、水産史や漁民文化の研究、民具を軸とする物質文化研究の中心的存在となっていく。

日本常民文化研究所は、1957（昭和32）年に『日本水産史』を、翌1958（昭和33）年に『日本の民具』を編集し、角川書店から出版した。これらは、渋沢敬三の還暦記念論集として編集されたもので、戦前のアチック・ミュージアム同人らを中心に執筆された。以下の目次をみればよくわかるが、アチック・ミュージアムが推進した研究のうち水産史と民具研究を総括した内容であった。その内容は、その後の『常民文化研究』、『常民文化叢書』として刊行されていく成果へと橋渡しされていった。

『日本水産史』目次

水産資源論（羽原又吉）	水産養殖（伊豆川浅吉）
網漁業（山口和雄）	東京湾の海藻をめぐって（櫻田勝徳）
釣漁の技術的展開（宮本常一）	水産製造（伊豆川浅吉）
捕鯨（伊豆川浅吉）	製塩（揖西光速）
鱒漁（祝宮静）	古文書と魚名の漢字（藤木喜久馬）
氷上漁業（竹内利美）	水産史料（宇野脩平）
鵜飼漁業（竹内利美）	あとがき（日本常民文化研究所）

『日本の民具』目次

民具について（岡正雄）	作業結び（額田巖）
日本の民具研究沿革（桜田勝徳）	火・家具（宮本馨太郎・宮本常一）
民具調査と民具記載（小川徹）	食器（宮本常一）
民具と絵画（遠藤武）	吐噶喇列島の民具（早川孝太郎）
衣（遠藤武）	地方における農具の変遷（吉田三郎）
庶民の染色（後藤捷一）	民具と山村生活（竹内利美）
かぶりもの（宮本馨太郎）	現存漁船資料による日本の船の発達史への接近 の試み（桜田勝徳）
履物（宮本馨太郎）	あとがき（日本常民文化研究所）
背負い梯子（磯貝勇）	

水産史研究について総括した『日本水産史』の目次は、戦前に構想された『日本科学史 農学（漁業）』（日本学士院明治前日本科学史刊行会）が強く意識されている。本書と同時期に編集され、1958（昭和33）年に刊行された『明治前日本漁業技術史』（日本学士院、写真3）は、本来の『日本科学史 農学（漁業）』により近い構成となっている。『明治前日本漁業技術史』のはしがきには、「本書は、昭和三十三年度の文部省研究成果刊行費助成により刊行したものである。なお、この編集費は、財団法人光華会（旧紀元二千六百年奉祝会）から全額支給されたものである」⁽⁵⁾。とあるように、本書は刊行されるはずであった『日本科学史』を再構成する意図のもと編集されたものであった。

『明治前日本漁業技術史』目次

第一編 釣漁技術史	第二章 原始的網漁
第一章 序説	第三章 立切網漁
第二章 釣具の意義	第四章 底網漁
第三章 釣漁法の分類と解説	第五章 浮網漁
第四章 釣鉤	第六章 建敷網漁
第五章 釣糸	第七章 沖網漁
第六章 テグス	
第七章 釣竿	第三篇 雑漁技術史
第八章 ウキ	第一章 捕鯨技術史
第九章 錘	第二章 氷上漁技術史
第十章 天秤	第三章 鵜飼漁技術史
第十一章 餌料	第四章 築漁技術史
	第五章 釜漁技術史
	第六章 魷漁技術史
第二編 網漁技術史	
第一章 総説	

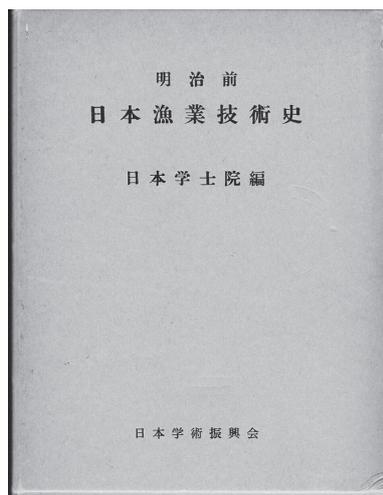


写真3 『明治前日本漁業技術史』の表紙

『明治前日本漁業技術史』は680頁のボリュームのある書籍であるが、『明治前日本漁業技術史』の内容を当初構想された『日本科学史 農学(漁業)』と比較すると、その内容は「第三編 各説」の「第一章 網漁業」「第二章 釣漁業」「第三章 雑漁業」「第四章 採捕特殊装置」「第五章 捕鯨、氷上漁業そのほか特殊漁法」の一部でしかないことがわかる。

6. 浮き彫りとなったふたつの課題

筆者は渋沢水産史研究室同人らの活動は、渋沢敬三がアチック・ミュージアムを軌道に乗せる過程で謳った“ハーモニアス・デヴェロップメント”の理想、すなわち異なる個性の相乗効果によって高い次元で実現する研究のコミュニティ構築の、実践の舞台であったと考えている。そしてそれが実際にどのようなものであったか、チームとしての目標を共有する一方で、ひとり一人の若い知性が目指したものは何であったか。そして彼らはどのような研究成果をあげたのかを具体的に確認してみたいという意図から、共同研究「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」に研究メンバーらと取り組んだ。

この共同研究で実施した共同調査や、メンバーそれぞれの調査研究、研究会等における議論からは、当初構想したものから大きく飛躍した論点が争点となっていった。それが冒頭でのべた次のふたつの論点である。

ひとつは、「水産史研究の同時代的な布置」(図2)である。時代の要請に応えつつ、自分たちのめざす常民文化研究とどう折り合いをつけて行くか、特に戦時体制に向かっていくなかでは、それが極めて重要な要素であった。この点を再考することなしに、渋沢水産史研究室の研究を理解する

ことは不可能である。アチック・ミュージアムの研究を、民俗学史としてのみならず、同時代における歴史的、社会・経済的背景から冷静に分析する視点を、「水産史研究の同時代的な布置」から検討する必要がある⁽⁶⁾。

もうひとつは、「問題意識の多様性」である。渋沢水産史研究室に関わった若い彼らは、日本の常民文化研究という旗印のもとに集い、日本科学史の一分野としての水産史を描き出す目的を共有していた。しかし、彼らは別の研究者に置き換え不可能なほど、ひとり一人の個性において研究を展開し、研究上の問題意識は決して一枚岩ではなかった。個別の問題意識が集まってはじめて、ハーモニアスに響き合うことができたのであるが、それぞれの問題意識は同時代の研究状況を理解するための材料ともなる。

図2は、共同研究の最終報告会として開催した前掲の公開フォーラムのディスカッションで得られたキーワードをまとめたものである。下部には、太文字でアチック・ミュージアムが用いたさまざまな調査法を、細文字で研究対象を列記している。上部にはアチック・ミュージアムの研究に重要な影響を及ぼしたであろう同時代的な状況を列記した。

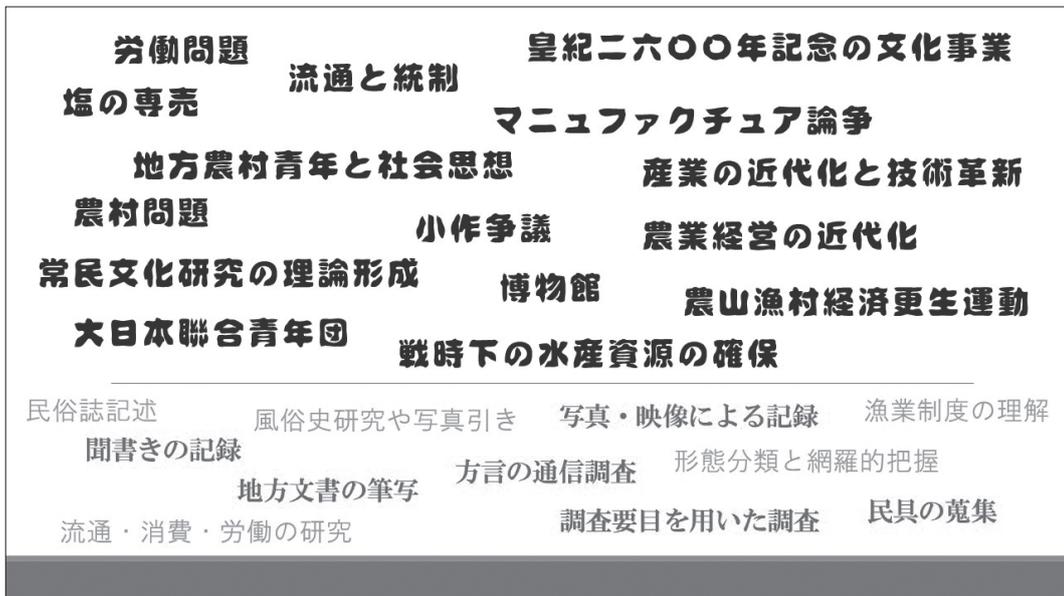


図2 アチック・ミュージアムをめぐる同時代的布置

注

- (1) 渋沢敬三 1935「アチック根元記(一)」『アチックマンスリー』第一号より
- (2) 渋沢敬三は「ハーモニアスデヴェロップメント」と表記しているが、本稿では現在一般的な英語のカタカナ表記として、「ハーモニアス・デヴェロップメント」で統一して表記する。
- (3) 掲載されている論考は『豆州内浦漁民史料』を用いた研究やその後の調査報告として、祝宮静「豆州内浦長浜村概観」、山口和雄「近世豆州内浦大網漁業に於ける網度について」、櫻田勝徳「長浜村の五人組組織」、野沢邦夫「長浜村網度日練帳考説」、戸谷敏之「内浦雑考」が掲載されている。これらは、『豆州内浦漁民史料』の「語彙編」および「参考篇」(いわば民俗編)の編纂を念頭に置いたものであったが、これらは最終的に刊行に至らなかった。その他、伊豆川浅吉「越後三面川鮭漁業の史的考察」、楫西光速「明治年間に於ける枝条架製塩並に機械製塩」、戸谷敏之「大津干鰯問屋仲間」、渋沢敬三「式内水産物需給試考」が掲載されている。
- (4) 内容は、日本の漁業史を俯瞰して論述した山口和雄「明治二十四年前後の我国漁業」、日本肥料史に位置づけた事例研究である戸谷敏之「江戸干鰯問屋仲間」、製塩釜と竈の発展について詳述した楫西光速「製塩業に於ける釜竈の変遷」、紀伊半島の捕鯨研究の一環として鯨肉の流通について調査した伊豆川浅吉「近畿中部地方に於ける鯨肉利用調査の報告概要」、宮木常一が『周防大島を中心とした海の生活誌』刊行後の追加調査データを

まとめた「御立浦周防安下庄の変遷」、戸谷敏之の事例研究「長防風土記に現れたる肥料の研究」、『澁澤漁業史研究室報告 第一輯』に掲載された内浦をフィールドとした論考を踏まえて羽原又吉が総括を試みた「豆州内浦大網漁網度株制の発展と漁村生活との交渉」、継続的に内浦での調査と史料整理にあっていた祝宮静による「豆州長浜大網漁業に於ける網子の地位に就いて」、伊豆川浅吉が内浦の漁業史を詳述した「後北條氏時代を中心としたる豆州内浦について」、水産史研究と「文献索隠」を融合させたような新しい試みとしての渋沢敬三「式内水産物需給試考」である。

(5) 日本学士院日本科学史刊行会編 1958、6頁

(6) こうした問題意識を共有できる研究として、橋村修 2016、丸山泰明 2013、由井常彦・武田晴人編 2015 などがある。

参考文献

アチック・ミュージアム編 1935 『アチックマンスリー』第一号

近藤雅樹編 2001 『図説 大正昭和くらしの博物誌：民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』 河出書房新社

渋沢敬三伝記編纂刊行会編 1981 『渋沢敬三』下巻 同会

日本学士院日本科学史刊行会編 1958 『明治前日本漁業技術史』 日本学士院

日本常民文化研究所編 1957 『日本水産史』 同所

橋村修 2016 「渋沢敬三の「日本実業史博物館」構想にみる農林水産業への眼差し」石井正己編 2016『博物館という装置：帝国・植民地・アイデンティティ』 勉誠出版 所収

丸山泰明 2013 『渋沢敬三と今和次郎：博物館的想像力の近代』 青弓社

由井常彦・武田晴人編 2015 『歴史の立会人：昭和史の中の渋沢敬三』 日本経済評論社